榛名神社社報

榛名神社由緒

一、鎮座地　沼田市榛名町二八五一番地

一、御祭神
埴山姫命（はにやまひめのみこと）（五穀豊穣の神）
倭建命（やまとたけるのみこと）（土地守護の神）
菅原道真命（すがわらのみちざねのみこと）（学芸指導の神）
建御名方命（たけみなかたのみこと）（安産加護の神）
大国主神（おおくにぬしのかみ）（良縁結びの神）

一、摂社神

一、由　緒　上野国神名帳利根郡の部に、倭建命は従一位宝高明神として滝棚の栗林に鎮坐せられ、菅原道真命は従二位雄根明神として根岸（現在地）に鎮坐されていた。

処が享禄三年（一五三〇）沼田万亀斎顕泰が幕岩城から倉内城に移る時、そこに鎮坐しあった宝高明神を城の西下の雄根明神の社に遷し、同時に顕泰の妻の産土神である榛名大権現（埴山姫命）を勧請して三神を一社に祀って榛名社と称した。

明治四十一年、社務所神社（建御名方命）を合祀したので御祭神は三柱一座と称せられている。

当社は沼田氏・真田氏・本多氏・黒田氏そして土岐氏と代々城主の尊崇を受け、本殿は元和元年（一六一五）真田伊豆守信幸公の奉建による豪壮華麗な桃山文化を代表するもので、大鳥居は老中にになった本多伯耆守正永公の奉献である。

明治六年郷社に列し、昭和三年県社に昇格したのであるが、昭和二十一年宗教法人となって以来この利根沼田の総鎮守と称せられている。

新宮司就任挨拶

本年三月一日、榛名神社十代宮司金子包幸が急逝いたしましたこと、氏子の皆様、関係者の皆様には生前大変お世話になり、また葬儀、百日祭に際し一方ならぬ御心情を賜わりありがとうございました。

亡父の後を継ぎ、氏子総代会の御推薦を頂き、四月一日付を以って神社本庁より十九代宮司を拝命いたしました。名誉宮司、参与・氏子総代の皆様の御指導の下、修養、努力してまいる所存でございます。

亡父包幸も亡祖母ふさも神様となり、必ずや幽世から見守って下さっていることと思います。宮司家皆力をあわせて奉仕してまいります。

氏子の皆様の御支持御協力をよろしくお願い申し上げます。

八亡父、亡祖母に捧げる歌〉

日の本に生れ出でにし益人は
神より出でて神に入るなり

伊勢豊受大神宮の江戸時代の祠官の詠歌集「死道百首」より。

十九代宮司　金子浩隆

発行日　昭和六十三年七月一日
発行所　沼田市榛名町二八五一
電話〇二七（22）二六五五
（23）五一二二
発行人　金子浩隆

名誉宮司社頭講話

お宮参り

私等日本人は、神様と一緒に暮して来ました。

私等日本人は、神様と一緒に暮しています。

自分一人だけの力で生きているのだという様な考えは無いと思います。母親の胎内にいた時から、生れて御宮参りをして、ずっと神様と一緒なのです。

生まれてからも、死んで御霊（かくりよ）に逝ってからも、神様と一緒に暮しているのです。

日本人の生活は何時でも神様と一緒なのです。

神様と一緒だから、如何に悲しい時でも、どんなに苦しくとも、ぐっと我慢して、歯を食いしばって、強く心確かに暮して行けるのです。

世の中には自分だけが不幸だと云って悲しんでいる人が多いようですが、神様は人をおいて下さっても、決して見捨てられたりはしません。

神様は誰でも平等に公平にお守り下さいます。

何時でも温かいお導きを下さいます。

神様の中で最も身近にお祭り下されるのは氏神様です。

氏神様は私等の「産土の神様」です。

氏神様は何処にいようと何の職業につこうと産土の神様は何時でもすぐに見通しておられます。

私等をいつも御守護下さっていらっしゃるのです。

とても心配なさっておられるのです。

「お宮参り」するとお宮参りをしてよかったなと思うことがあります。

苦しかったり、悲しかったりした時は、お宮参りをしてごらんなさい。

何かふっと心が晴れるところがあります。

何の気兼ねもいらないのです。

「お参り」は皆さんの御先祖様からの慣わしです。

誰もがやって来た事なのです。日本人の伝統なのです。

このお宮にぬかずく姿こそ最も正しい日本人の姿だと私は心の底から信じて参ります。

みこしの神輿

大利根の空に入道雲が出ると夏祭りが参ります。氷の砂が好きな子供達がまず"祭"にかじりつきます。

神輿と聞いただけでもわくわくしてきます。

神輿を担ぐ時は勇ましい掛け声をかけます。

神輿を担ぐ時は勇ましい掛け声をかけます。

中に重々しい神輿をかつぐ時は、ゆっくりと歩きを待っています。

もうしばらくの辛抱です。

神輿の声が聞えてくれば、もうじっとしてはいられません。

正に血湧き肉躍るの言葉通りですね。

昔からの掛け声は「ワッショイ・ワッショイ」です。

これは「和し合う掛け声」の流れです。

皆で和し合う掛け声」の意味です。

「尊い掛け声」の意味です。

「尊い掛け声」の意味です。

「尊い